

## 阿蘇草原再生協議会 第6回生物多様性小委員会議事概要

日 時：平成21年2月26日(木)9:30~12:00

場 所：大阿蘇環境センター 未来館 RDF 会議室

出席者：団体・法人8名、個人6名、事務局7名、計21名

## 1. 開会

あいさつ

出席者紹介

資料確認

## 2. 議事

## 1) 野草地保全・再生事業実施計画案

資料1「野草地保全・再生事業実施計画案」についての説明

〔九州地方環境事務所 / 岡野〕

(ニュースレターNo.16・・・日の尾牧野での野焼き再開を例に説明)

## 【協議】

委員長：環境省と一緒にあって取り組むという姿勢が現れてきている。活動計画と実施計画の二つに分かれ、阿蘇草原再生独自の活動計画と、自然再生推進法に則った実施計画の事業が進むことになる。今回は傍聴者がいらっしゃるが、本小委員会では、希少動植物の情報についても触れることがあるかと思うので、各自注意していただきたい。

委員：事業の予定箇所について、協議会に参加している牧野だけが対象となるのか。

事務局：協議会に参加していただいている牧野に保全計画を作っていただき、保全計画を作ったところが事業の対象となる。

事務局：これまで実施した箇所は協議会に参加されている牧野で、参加されていない牧野については、並行して協議会に入っていた。協議会に入っていたことが条件としている。

委員：産山は含まれていないが、実施する場所は国立公園内に限られるということか。

事務局：現況調査、牧野カルテの作成については、全体構想の対象区域として広くとらえているが、環境省の事業としては自然公園等整備事業なので公園内に限定される。

委員：国立公園内の牧野であっても事業費がつかないこともあるということ。

委員：それが理解できていれば区別できるだろう。

委員：この場は多様性についての委員会だが、p.23に生物多様性としていながら描かれているのは植物のみの多様性である。特に植物だが、阿蘇では昆虫も多様化している。RDBの大部分は阿蘇である。ツルフジバカマをヒメシロチョウが食べる、ワレモコウをゴマシジミが食べるというように、希少ではない植物に希少な昆虫がつくこともある。多様性という言葉を使うときには「動植物」ということを基本としなければならない。特にゴマシジミはワレモコウの花に卵を産み付けるが、ワレモコウの花はよく採集されるため、ゴマシジミが急激に減少している。ゴマシジミのランクが2階級特進している。希少というイメージが強いが、普通種にもその上の生態系がついていることが分かる文章にしたほうが良いのではないか。

委員：同感である。過去に比べ、環境省が取り組む今のアセスは進んでいる。今の生物多様性のた

めのアセスの項目は、植物、動物、生態系の3つである。生物多様性は、重要な種を指標とし、大切なのはつながりであって普通種であろうが量的なバランスの関係が重要。生物多様性はアセスに倣わなくて良いのではないか。

委員:p.23「希少な動植物の～野草地の保全を行う場合は」とあるが、今まで牧野調査を行った中で、生物多様性を目標としていない場所があるのか。

事務局:全体構想についても”多様な動植物”として全体計画を作っている。維持管理手法を省力化した結果の効果をどこで見るのかについて悩んでいるところだが、わかりやすさが重要だと考えている。その一つとして、植物を挙げ、対外的な説明として”希少な”という言葉を使った。たとえば5年後にダイレクトな成果を見ると、何をもって多様性の効果を評価し、対外的に説明できるものにするか、皆様のご意見を頂きたい。

委員長:まず、一段落を一つの文章として書くのをやめるべき。2つ～4つに区切り、接続詞を多用することでわかりやすくなる。希少な植物について触れるとき、多様な草原が確保されることで動物も伴うというような言い方をすれば良いのではないか。「希少な植物」というところには動物もくっついてくることを示せば、動物が主役にならなくても良い。

委員:アセスは全国いろんな所でやっていて、お金も絡んでおり、様々な手法が確立されている。植物、希少種だけで判別するのはどうかと思う。このモニタリングは予測評価も含んでいると思う。このまま行くとどうなるのか、多様な自然界ができるのか、絶滅してしまうのか、指標生物だけを見ていても分からないと思う。早く評価をしたいというのも分かるが、まずは指標生物を決めなければいけないのではないか。

事務局:その指標生物を教えていただきたい。場所・牧野によっても違うだろうし、この小委員会で指標を絞ってもらえれば追いかけることはできるかと思う。

委員:ミニアセス的に、モデル的にやってみてはどうか。ただ、通常のアセスであれば、事業者が目標設定等も行うが、今回はこの小委員会が目標や指標を示すのか、実際に事業者サイドとして行うのか、我々の役割を決めなければならない。アセス的な目標を立てるのであれば、それなりに時間をかける必要がある。このメンバーが集まれば力量としては十分出来るが、時間的にもこのような会合の場の中で行うのは現実的ではない。

委員:事業効果というのは、税金を事業に投入した以上は検証も必要だということだと思うが、このモニタリングがそれに相当するのか、あるいは協議会や牧野組合がモニタリングとして簡単にできるものを想定しているのか。法廷に出す実施計画で費用がつくととなると、最低限のアセスメントが必要になると思う。別途ワーキンググループを作った方が良い。

事務局:牧野カルテは委員先生にも入っていただいている。今年作っている中で提言いただきたい。

委員:指標の問題と牧野カルテについて皆さんにお聞きしたいことがある。事業の基本は牧野カルテとなるが、野草地の現況や植物の生育状況などの生物多様性の調査は、牧野への聞き取りであるためほとんど分からないのが実態である。これを元に既に調査をしたと考えられて、希少草原性植物の生育状況による事業効果の検証についても聞き取りで行うと同じことになる。この流れでいくと最後に検証する人が困るのではないかと思う。

委員:アセスの事前調査というレベルに達していないということ。

事務局:逼迫した牧野の状況を見ると、アセスをやっている余裕はない。まずは牧野組合がこれだったら維持管理できるという思いを抱いていただくために牧野カルテを作成したことが

ら、アセスというものを想定していなかった。

委員:アセスは一つの例として出した。どういう調査が必要になるか考えるために用いたもの。

委員:できるだけ簡明で指標性のあるもの、さらには牧野が使えるものだと良いとのこと。では、具体的に選べと言われると非常に悩む。希少種が存在しないところもあることから、典型種に着目した方が良いのではないか。多様性の高い低いという問題については、野焼き管理をすると多様性は下がり、カヤ、シバ草地も低い。刈り取り草地は多様性が高いことから、それぞれの指標種が異なってくる。また、誰が判断するのかということ、このメンバーが一番適しているだろうから、先ほどあったようにワーキンググループを立ち上げてはどうか。

委員長:みんなで話し合って収まるのを探す以外ない。植物だけではなく、動物も一緒に考えていただきたい。p.4 で感心したのは、草原は採草・放牧で維持されてきたいということが明文化されたこと。野焼きを何のためにするのかということ、害中駆除といわれてきたがそうではない。藪にならないために行っているということを言い伝えていかなければならない。

事務局:(先ほどの質問に対して)ある場合とない場合が出てくると思うが、牧野カルテを作っていく課程で牧野組合の方が望まれるかどうかにもよる。環境省として重要と判断すれば、別の視点でやるべきところはやる。牧野組合への働きかけも行うが、牧野のモチベーションも関連してくる。

委員:現在、そのような牧野が出てきているのか。

事務局:現状としてはハッキリとした目標をもってやっている所はない。

委員:今回、牧野カルテを作ってもらい、実際はもっと進んでいる段階だが、中身が伴っていない。野草地保全の目標は立てたが、植物の生育状況について聞き取りだけで現地で調査はできていない。今年は野焼きをしようと思っていて、植生調査をしてほしいと言われているが時間がなく、組合員がせっかく野焼きすると決めたので、調査をする前に野焼きをすることになった。5月~7月になると思われる調査後に野焼きをすると、時期的に困難である。その後、木の伐根や除去を行い、草原に戻して草刈りが出来るような状態にする必要があると思う。その段階まで来ているが、調査はできないでいる。先ほど言われたように、植物だけでなく昆虫も調査が必要で、カルテを作る際に調査が必要であったのではないかと思う。今年は4~5つの牧野が乗り出ているようなので、調査ができる仕組み作りが必要。中身が伴わない取り組みになってしまう。早めに専門の方と一緒に調査をすることが必要。

委員:先ほどあったように、調査内容や指標種を決めるワーキンググループが必要だと思う。以前、ヨーロッパ・スイスを中心に牧野の視察をしたことがあるが、EU諸国はこのような伝統的な牧野の管理をしている場合にはEUから補助が出て、所得の半分近くがEUや国からの補助金となる。指標は典型性を基本とした指標種を選定し、牧野にそれがあかないかによって判断されて補助金が出る。結果的に補助金が出るという経済効果もあるし、景観が維持され、観光資源としても価値が高まり、農産物の価値も高まるという循環ができる。阿蘇でも同様な仕組みができれば良い。生物多様性という視点だけでなく景観も美しいということをもっと発信したい。

委員:牧野ごとのカルテをもとに、地域性や牧野間での違いから指標種を抽出する作業が必要だが、このような会議の場ではできない。ヨーロッパの場合、フロラから洗い出して、草原性の

種を取り出し、一般的な種の中であらゆる希少種を包含するような生態系を代表するものを選び出す。湿った場所、乾燥した場所、劣悪なセンシティブな場所などに分けて、それぞれの指標種を出し、そのうちの何種類かが牧野にあればお金を払うという仕組みである。それだけの作業をしなければならず、皆さんにその覚悟があるかどうか。

委員長: そうなるように進めなければならない。

事務局: 先ほど言われたように保全計画だけで終わるのではなく、追加的な調査をすることとして計画を作成している。「希少な植物」を「草原性動植物」に修文する。

委員: 「希少な動植物を含む豊かな生物相」もしくは生態系としてはどうか

委員: 最近、山や草原にスギをたくさん植えるのは何のためか。

委員: 今、牧野の管理が出来なくなって利用もしなくなって、どうやって管理していくかが課題となっている。植林すると、管理が楽になり、補助金がもらえるので、地元の方が考えて植林されている。

委員: スギが大きくなると草原がなくなってしまう。

委員: 私たちもそう思う。できるだけそうならないように、草原の価値を伝えて、守っていきたい。

委員: 最近植林していないのではないか。

委員: 牧野が管理できないため、草原を植林する区域に編入するようお願いされて作った。公団造林の補助金がもらえ、自分のところで植えてもお金が入っていた。さらに、当時スギは今の10倍ほどの値段であった。

委員: ハナシノブは過去に52箇所を確認されていたが、現在残っているのは1箇所だけ。ほとんどがスギ林となり、なくなってしまった。ただ、ハナシノブの生育地は国立公園外である。

## 2) 阿蘇草原再生に向けた活動計画案について

### 活動計画案の協議

事務局: 今後春以降の活動計画案について11件が提出されているが、主に生物多様性小委員会に関連する計画案についてはあがっていない。必要に応じた検討協議として資料にがついている1件とNo.1の新宮牧野での取り組みについて意見いただきたい。今回は草原環境学習と牧野管理に関わるものが多く、次回小委員会が6月に予定しているが、それまでに各自報告いただける取り組みがあれば活動計画案として提出いただきたい。

事務局: 昨年度からの継続計画として、「ワクド池湿地再生の取り組み」と「花野再生プロジェクト」がある。昨年度審議いただき、承認を受けているので、今回は挙げていないが取り組みとしては継続している。

新宮牧野内、野焼き作業軽減のための小規模樹林除去 / 環境省九州地方環境事務所

- 報告者代理: 事務局/宿利

### 【協議】

(特になし)

野焼き及び輪地切り支援ボランティア活動 / 阿蘇グリーンストック

- 報告者代理: 事務局/宿利

### 【協議】

(特になし)

## 【承認】

委員長：全て承認ということで異論なければ次に進みたい。

### 3) 波野実証試験地 調査報告

スライド及び資料 3-1「草原管理手法に関する実証試験 調査結果」についての説明

〔熊本植物研究所 / 佐藤千芳〕

- ・ 草刈り（7月刈り、9月刈り）や野焼きなど様々な手法を用いて管理した野草地において、平成11年度に実施された植生調査と同様の手法で調査し、植生の変化を追跡し、草原管理の効果を検証する内容。先ほどと同じで、どう評価するのが課題である。
- ・ 15年ほど何もしていないところだったが、構成種の生産量の変化が起きている。
- ・ 放棄地、野焼きをしているところを比較。野焼きをしていない場所の方がススキがあまり生育してない。前年の枯れ草があるため伸びが悪いようである。
- ・ 各調査区に何が生育しているかを示す。9月に調査しても、7月刈りした後なので草丈が小さいため、7月刈りの直前に調査した。5月でも調査はしたが、群落の高さが50cm以下で場所によってバラツキがある。種類に関しては、7月、9月刈りになるほど若干多い。植物が十分生長した7月と比較すると、見た目で群落の高さが違う。9月刈り、7月刈り、7月・9月刈りになるにつれて草丈が低くなることから、圧力をかけるほど草丈は低くなる。数が多ければよいのではなく種類が問題で、セイタカアワダチソウやヒメジョオンなどの外来種も見られる。
- ・ 7月～9月になるとヒメジョオンで真っ白になり、見た目にも変化が分かる。
- ・ 植被率を見ると、野焼きするとススキが元気になることが分かる。7月・9月刈りはヒメジョオンで白くなり、相観が明らかに違う。周りは野焼きのみの管理である。
- ・ 明らかに変化が出てきたのはススキの生育量。放棄区と野焼きでは4と5で野焼きの方が多い。9月刈りではススキの量はあまり変わらないが、7・9月刈りでは10%以下に減少する。刈り取り圧がかかると1番反応するのはススキである。阿蘇の他の地域ではススキが減るとトダシバが増えるが、トダシバ、ネザサは波野に生育していないため、今回のデータは波野特有のものといえる。
- ・ 希少種の出現状態を見ると、刈り取り圧とは関係なく出現しているので、指標種としては使えないと考える。ススキが大きく動くなら、ススキを見ても良いのではないかと思う。
- ・ その他の種について、7月・9月刈りでは出でおらず、ワレモコウなどどこにでもあるものは刈り取り圧が高いところほど生育量が多くなる。オトコヨモギなどは放棄区、野焼きのみの所ではほとんどなくなり、刈り取り圧が大きいと生育量が増えてくる。刈り取り圧の問題は生育種の予備変動として知られた。
- ・ 刈り取りをした後に地面が露呈することとヒメジョオンの生育と相関関係があると思う。地際も一緒に刈り取っているので、今回は通常の草刈りとは異なっている。
- ・ 産山地域の道路沿いの様子。年に1回刈り取りし、刈り取りしたところにヒメジョオンが出ている。刈り取りしないところは出でこない
- ・ 畑で、斜面は農家が刈り取りをするが、放棄するとヒメジョオンが生える。圧力が高すぎて特殊なことが起こってしまったのではないか。
- ・ 5月末か6月の段階で、2番草まで刈り取る所ではヒメジョオンは全く見られない。

- ・ 地際ではなく、少し上で刈るとヒメジョオンが出にくくなるのではないかと。ただし、現段階では刈り取り圧の問題が波野特有の問題なのか判断つかない。
- ・ 結論として、群落はいろいろ変わっているが、刈り取り圧によって構成種の量的変動が起きていることがわかる。
- ・ 具体的に日常の管理にどう当てはめていくかを考えた場合、再生目標をどこにおくかによって変わってくる。種多様性を高いことを目標とすると7月・9月刈り、単相型草地であれば刈り取り圧をもっと高める、ある特定の植物、例えばユウスゲならば9月刈りを継続する、または波野の代表的な草地を目指すとなると9月刈りが適するが、これらの関連性を踏まえて、作業面からも実施できるものを選択しなければならない。
- ・ ある特定のパターンを考えるのではなく、牧野毎にパターンを選択していかざるを得ない。
- ・ 牧野毎の代表的な状態というのが十分把握されていないので、事前調査が必要。
- ・ この小委員会でも調査の基本的なことを考えておき、共通理解のもと調査手法を決めなければならないと感じた。
- ・ それぞれの牧野組合が主体になって考えるのもいいが、判断基準・材料がないので、ある程度のモデルを作らないとゴールが見えないのではないかと。先ほどのトダシバ、ネザサにもあるように波野の結果はモデルになりにくいので、これから目標値あたりを設定していく必要がある。

#### 【協議】

委員：ススキ草地だからヒメジョオンが入ってきているとも考えられる。里山に近いという立地も関係する。大観望では進入経路がほとんどない。そうすると波野だけの成果になるので、各地域に当てはめることは無理である。

委員：試験地付近には南向きの斜面もあるので、同じような比較データをとってはどうか。試験地は北向き斜面なので、日の向きでも異なると思う。

委員：同感である。試験区北側と南側ではチョウの分布が異なる。試験地では昔、希少ランクの高いもの生息していたが、北側ではほとんど見られない。

委員：典型植性をどのように目標設定するのかについては、ある程度件数を歩かなければならない。どこを選択し、調査するのかなども皆さんで考える必要がある。

委員：この話を牧野カルテの中で出来れば良いが。

委員：いくつかのポイントを選んで、現時点の管理体制の中でどのような植生があるか現状を調査してはどうか。そこをこれからも調査してもらってはどうか。

事務局：波野試験地は希少性植物があるという理由で選んだところ。波野試験地をこれからどうしていくのか、草原の維持管理と草原性動植物との関係性を他へ応用するとしたらどうすべきかについて課題となっている。他で行う場合、地点数を増やすと1地点あたりの精度が薄くなってしまう。ススキの動きを見るということが提案されたので、高さの変化を見ていくのも一つではないか。

委員：各大学の研究機関に掛け合ってはどうか。阿蘇の草原を題材にして論文を書き、博士課程まで行く人もいる。自分が子どもに草原を教えるときに、博士になれるような沢山の研究材料があるということも伝えている。環境省からも働きかけていただくと取り組み方も変わるのではないかと。

事務局:協議会で呼びかけていってはどうか。

委員:モニタリングの内容に客観性があるのか評価してもらうことも必要。

委員:皆さんにそこまでの覚悟があるのか、というところ。

委員長:もちろん環境省にも頑張ってもらふ必要はある。波野にトダシバ、ネザサがなかったということには言われて気付くほどで、草原はそこにあって当たり前のものという意識がある。

事務局:波野試験地を今後どうすべきか。現在の手法での調査を継続するのかどうか、今回で一区切り付けたいという考えがある。

委員:調査は5年ごとで、従来の管理は続けてはどうか。マンパワーと継続性の問題。続けて調査する必要はあるが、毎年調査する必要はない。休閑したときにどんな植生で安定するのか調べるべき。全てにおいて管理できるかどうかに関わってくる。

事務局:管理手法に関して、現在パークボランティアが主となって行っている。昨年に出していただいた活動計画について結果報告が出ているので報告する。

資料 3-2「草原管理手法に係る実証試験地の管理手法について」の説明〔事務局/宿利〕

#### 【協議】

委員:ボランティアの作業を見たが、大変である。継続性は難しいと感じた。

委員長:昔は刈っていた草を使うという目的があったが、現在は草が役に立つものでなくなっているのが大きい。

事務局:波野試験地はグリーンストックのトラスト地である。管理について野焼きは可能だが、採草は難しいと聞いている。

委員:草原性の種は耐えながら生きているものが多いので数年管理がなくても問題ないと思うが、現状の調査はしているので5年後に調査してきちんと考えるという方法もある。

委員長:藪へ移行してきたら3年くらいで区切るなどでもいい。

事務局:試験区を減らすという方法はどうか。

委員:減らすということは試験管理をするということ。野焼きだけの管理で、それぞれの試験区がどのように変化するか見ても良い。

委員:以前、対象区を作ったときに一度辞めて、前データの意味がなくなってしまったことがあり、続けてはどうかと思う。

委員:波野では再生力が強いので毎年処理を加えているが、他の地域では1年おきに2年おきにしているところもあるだろう。7月刈りで9月に調査では意味がないので、直前の刈り取りの影響も考え、1~2年休ませることで刈り取りの影響と関係なく全く同じ条件で見ることが可能。

委員:放棄区はどうするのかによってどう変わるか。

委員:草刈りをして1年刈らなければ、2年目には元に戻る。

委員:三瓶では比較的肥沃なところでも3年では戻らない。条件によって異ってくる

委員:斜面にもよる。継続的に続けてはどうかと思う。周辺の植生も見るとよいのではないか。

委員:9月に刈ってバイオマスに利用するなど考えられる。

事務局:ボランティアはやる気がある。

事務局:斜面地で上に草を持ち上げなければならず、大変。下にも試験区があるため下には下ろせない。

委員:試験区の上にビニールシートを敷いて滑り下ろしてはどうか。

事務局：まず道を作らねばならない。試験区を別の位置へ変更しても良いものか。

委員：三瓶では $6 \times 6 = 36$ のプロットを作り、分割区法で処理区は1まとめにしている。6処理できるので数値的に統計処理が可能。2反復では統計処理できない。

事務局：統計処理ができないと専門家にも指摘を受けた。

委員：継続しても疑問を抱かれるデータであればリセットする必要もある。

委員：これから牧野カルテで実施していくので、早めに調査手法を決めた方がよい。言うのは簡単だが、やるのが大変。

委員：効果を判定するのか、推定するのか、現状をどんどん拾っていくことが必要。いくつかの調査項目をつくり、牧野の管理手法も含めて出来るだけ沢山のデータをとっておかないといけない。その戦略をみんなで考える必要がある。一旦植生を戻すためには全植生を捉えなければならない。その手法を委員会で決めてはどうか。

委員：今生えている木の種類の特定は野焼きの後でも出来るのか。

委員：野焼きの後でもすべて枯れないので同定できると思うが、ひこばえがあればより分かる。

委員：では、今年一年は刈らないで、調査をしてから刈るという風にする。

委員：花野協会の原野では、最初樹木があったが今はない。焼いた後に刈ると出てこないようである。2年目からはススキが繁茂するので、それでひこばえが燃えるようである。伐根は全くしていない。

委員：それ以上に、焼く前に刈ることに比べたら作業量的に楽である。費用対効果がある。対馬でも焼いてから刈っているようだ。

委員：野焼きに参加される内、40代以下の若い人は何人ぐらいいるか。

委員：10%くらい。

委員：先日のグリーンストックでの野焼き研修では、還暦が40%、若い人は一人だけで父親に連れられて来ていた。50代でも若いという感覚。

委員：学校のサークルでモニタリングをしているところもある。

委員：ある高校の先生が個人的に生徒を連れてくるという話はあった。授業となると、安全や事故の際の責任がついてくる。

委員長：今学校側は非常に慎重になっている。

委員：去年、牧野でやった体験野焼きでは高校生8名、先生が1~2名来られた。小学生を対象としたときは子どもが19名参加された。大学生でも新潟など遠方からボランティアで来ている。

事務局：最後に、波野の調査区について、今から続けるかどうか、試験区、調査手法を変えるのか、どのパターンで進めるのか意見をいただきたい。

委員長：1年間休んだからといってどうにもならない状況になるというわけではない。ワーキンググループを作るなどして時間をかけて具体的に話し合っていきたい。

事務局：この小委員会を活用して再検討するという事でよいか。

委員：手法が決まった段階で波野試験地をどうするか考えた方がよい。

事務局：外来植物が増えているところも同様の手法で進めて良いのか。また、少路先生が調査されていることもある。

事務局：今年も野焼きを3月に行う予定なので、試験地で7月刈りするまでに結論が欲しい。

委員：草刈り作業は大変だが、草寄せ機を付けて刈った方がよい。



委員：草は刈り取った後すぐに持ち出すのか。乾かさないのか。牧野では現実には10月いっぱいまで干し草狩りをする。水分含量も考慮すると10月の方が作業がしやすいのではないかと。

委員：最初に作った段階で、9月20日頃が草刈りのスタートなので、それと合わせたのではないかと。

事務局：波野試験地については7月までに集まる機会を設けて検討したい。現在の管理と指標種の関係については牧野カルテに取り込み、ヒアリングによる維持管理と現存の生物相との関係を考えていきたい。これについて委員先生を始め数名でコンパクトに議論できる場を設けたい。野焼き再開の可能性があるのは町古閑と日の尾だが、そこを委員会で調査してはどうか。次回委員会を現地で開催し、現地を見ながらその場でみんなで話し合えば。

委員：刈る前の状態に入って、調査するのは大変。焼いた後すぐ把握してもらって、芽が出たときに植生調査がよいのではないかと。

委員長：使用前、使用後を調べるのは良いことだが、気候の良いときを見て、事前から調査計画を立てておくべき。

委員：野焼きの後で調査に入るのであれば楽に入ることができるが、なくなる種もあることを踏まえる必要がある。調査をする場所決めも大変である。

事務局：日の尾はすぐに燃やす予定がないので、事前調査に取り組むことはできる。

委員：先ほどの小規模樹林の除去を行う牧野でもできるのではないかと。

事務局：是非皆さんと一緒に現場を見ながら、効果で何を見ていくかガイドライン的なものを作っていくたい。

#### 第8回全国草原サミット・シンポジウム

- ・ 今年9月26日～28日にかけて北広島町で開催予定。
- ・ 興味のある方は是非参加いただきたい。
- ・ 阿蘇郡で草原学習に取り組む小学校があれば参加いただき、他地域と交流をしていただきたいと考えている。後の草原環境学習小委員会でも協議いただく予定。

#### 里山100選

- ・ 草原については阿蘇と隠岐の2カ所しか選ばれていない。全国各地に草原があるが、審査員をはじめ多くの方々には草原に対する意識が低かったようである。

委員：今牧野で聞き取り調査をしているが、どこでもシカの話が出てくる。大観望から小国に向かって、小さな群落のスギ・ヒノキがあり、多くが皮剥の被害を受けている。

#### 今後の予定

##### <協議会>

- ・ 第8回協議会は、3月4日（水）未来館で13:00～開催。
- ・ 議事は、本日審議いただいた野草地保全再生事業実施計画と活動計画の報告、ロゴマークの審査、新規小委員会の立ち上げ、草原再生募金についてワークショップという形で話し合う予定。

委員長：先ほどワレモコウの話もあったが、盗掘が絶えない。今後は、盗掘に関する対策についても議論していきたい。

#### 3.閉会